



ワークショップ 前

1. 育てたい生徒像

- 自分の思いや考えを表現し、対話を通してより良いものを創り出そうとできる生徒。

2. 単元(本時)の授業の目標

- 『徒然草』「花は盛りに」を読んで、「想像すること」の魅力に気づき、文章表現で実践できる。

3. 授業の中での具体的な問い

【Extensions】

- ①あなたが読者に想像してほしい熊野古道の自然美とは。熊野古道の自然美を伝える文章を綴ってみよう。
 - 筆者の美意識(想像によって美を感じる)をふまえる。
 - 学年行事である熊野古道ロングハイキングと関連させながら考える。

【Connections】

- ①筆者の美意識と現代の(自然に対する)美意識を比較して意見を述べてみよう。

【Ideas】

- ①本文の空欄 [] に当てはまる語を入れよう。なぜその語が入るのか説明しよう。(花は[盛りに]、月は[くまなき]をのみ見るものか。～すべて、月・花をば、さのみ[目にて見る]ものか。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも[思へる]こそ、いとたのもしう、をかしけれ。)
- ②筆者が美や情を感じる際に必要だと述べているものは何だろうか。また、なぜそう考えるのか。

ワークショップ 後

1. 育てたい生徒像

- 自分の思いや考えを表現し、対話を通してより良いものを創り出そうとできる生徒。
- 多面的に物事を捉え、人や文化を尊重できる生徒。

2. 単元(本時)の授業の目標

- 筆者(兼好法師)の美的感覚(感じ方)に触れる中で、自身の感じ方に思いを致し、そこに可能性を見出せる。

3. 授業の中での具体的な問い

【Extensions】

【Connections】

- ①-1 筆者(兼好法師)は「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。」「よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。男・女の情けも、ひとへにあひ見るをば言ふものかは。」と述べているが、本当にそうか。
- ①-2 あなたが筆者(兼好法師)と似たような感じ方(不完全なもの、うつりゆくもの、目には見えないもの…に趣や魅力を感じる)で何かに趣を感じることがあるとしたら、それはどんなときか。
- ①-3 筆者(兼好法師)の感じ方が私たちにも息づくものであるとしたら、それはどのようなところで生かされそうか。

【Ideas】

- ①-1 筆者(兼好法師)は「花」「月」「男女の情け」について、どのようなところに「あはれなり」「をかし」と感じているか。
- ①-2 「あはれなり」と「をかし」に違いはあるのか。
- ② 筆者(兼好法師)の美的感覚を象徴していると思われる動詞は何か。そこに何か共通点はあるか。
- ③ 筆者(兼好法師)はなぜ反語形「かは」を多用しているのか。
- ④ 『枕草子』「春はあけぼの」と比較したとき、清少納言と兼好法師の美的感覚の相違点は何か。

ワークショップを通した気づき+NEXT STEP

1. 深めたい、解決したいと思っていたこと

- 古典を現代社会に生きる生徒たちに生かせる問いを考えたい。

2. 改善のポイント

- **新たな気づき**：「過去－現在－未来」という捉え方。

筆者（兼好法師）の美的感覚（感じ方）と「水の東西」（山崎正和）における「流れる」もの「時間的」なものを尊重し、「形なきもの」「見えないもの」を恐れない感覚に共通点があることに気づいた。→現代文と古典の往還で、学びを深められることがありそうということ。

熊野古道と関連づけようとしたのは、熊野古道は実際に歩くことで「時の流れ」を感じ、今は「見えない」けれどもかつて熊野詣に来られた人々のことを想像することもでき、文化を感じられる場であるからだと改めて思った。

Cの問いを考えるときに、Iが重要だということ。

- **改善のポイント**：Cの問い「ワークショップ前」の「①筆者の美意識と現代の（自然に対する）美意識を比較して意見を述べてみよう」を、「ワークショップ後」には、生徒が古典を少しでも自身に引きつけて感じられるように、「①－2あなたが筆者（兼好法師）と似たような感じ方で何かに趣を感じることはあるとしたら」や「①－3筆者（兼好法師）の感じ方が私たちにも息づくものであるとしたら」と仮定して問いを再設定した。

3. 新たな問い～モヤモヤ感・先生方と共に考えたいこと

- （I・C・Eについて、問いの構造化について、理解を深めたい。）

Cの問いの具体化

	問かけの意図 (活用できる疑問詞・接続詞)	評価の対象とする内容	具体的な問い
1	本当か、そもそも What	批判的な思考により、与えられた前提を問い直している。	• 筆者（兼好法師）は「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。」「よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。男・女の情けも、ひとへにあひ見るをば言ふものかは。」と述べているが、本当にそうか。
2	そう言える理由・ 判断の根拠 Why	考えの根拠が示され、考えや論が論理的に関係づいている。	• なぜ筆者（兼好法師）は「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。」「よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。男・女の情けも、ひとへにあひ見るをば言ふものかは。」と述べるのか。 • なぜ筆者（兼好法師）は反語表現「かは」を多用しているのか。
3	仮定と反事実的推測 If, If not	仮定によって、条件や状況を設定し推量の質を高めている。	• あなたが兼好法師と似たような感じ方で何かに趣を感じることはあるとしたら、それはどんなときか。
4	～にもかかわらず Even though	異質な考えや矛盾等を取り入れることで、考察をより深めている。	
5	～なら、 ～が言えるだろう If then, If not then	前提に基づいて、新たな解釈や意味を付加したり、その幅を広げたりしている。	• 兼好法師の感じ方が私たちにも息づくものであるとしたら、それはどのようなところで生かされそうか。
6	関係性の理解・発見 What ⇄ Why ⇄ How	関係性を理解したり、発見したりすることで、見いだした意味や内容を言語化している。	
7	その他		